

さらにその四神と向き合う形で、青龍には神仙(龍を飼い馴らす御龍氏ともいわれています)、朱雀には同じ類の鳳、白虎には天鹿、玄武には辟邪(一角の神獣)などがみられます。また、内区文様の外側に銘帯がめぐります。「上大山 見神人 食玉英 飲豊泉 駕非龍 乗浮雲 白虎引兮直上天 受長命 壽萬年 宜官秩 保子孫」

(大山に上り、神人に見みゆ、玉英を食し、豊泉を飲む、非(交)龍に駕し、浮雲に乗ず、白虎引いて、直に天に上る、長命を受け、寿は萬年にして、官秩たる宜し、子孫を保たん)の31字の銘文がはいっています。その外側の外区には、流雲紋が一周します。鏡全体で天界の様子を表現しながら、神仙へのあこがれもこめた内容となっており、この時代の社会風潮の一端をかいまみることのできる作品です。

泉屋博古館学芸員 廣川 守

復元青銅鏡の製作について

この復元鏡は、古代と同じ輝きと画像が体験できる青銅鏡として、泉屋博古館(京都市左京区)が収蔵する漢時代の方格規矩四神鏡を復元したものです。写真技術の応用による文様と、実測断面図による形状と面反りを本物と同じに再現した原型から、鋳型を1点ずつ抜き取り鋳造しています。古代青銅鏡の成分分析値を参考にして、錫23%~25%、銅77%~75%の高錫青銅を使用しました。古代青銅鏡に3%程度含まれる鉛は、環境に配慮して加えていません。この鉛の有無によって青銅鏡の銀白色が大きく異なるものではありません。鈕孔(鈕の穴)は、古代鋳造技法と同じように、孔の中子(中型)を鋳型にはめ込んで鋳造しています。鋸歯文の一部には、泉屋博古館が監修した復元青銅鏡であることを証明する「泉屋博古館」の凹文字が刻まれています。映像を映す鏡面は、伝統技法の轆轤(ロクロ)で研削し本物と同じ面反りを作っています。その後、研磨作業で輝かせています。(※高錫青銅は性質上、強く叩く、あるいは落とすと簡単に割れてしまいますので、ご注意下さい。また、鋳上りの良いものを厳選しておりますが、青銅を鋳型に流す際に生ずる気泡が表面に多少あることは、ご了承願います。)

製作: (株) 檜原ブロンズ彫刻

泉屋博古館蔵

方格規矩四神鏡

解説書

[復元青銅鏡]

泉屋博古館所蔵 方格規矩四神鏡について

青銅鏡は、中国を代表する金属工芸品です。とくに紀元前2世紀から紀元3世紀にかけての漢時代到大流行します。当時、鏡面の白銀に輝くさまを陰陽の象徴である日月になぞらえ、単なる姿見としてでなく、人の心をも写し出し、さらには邪悪なもの正体を暴く呪術力を備えもつものと、珍重しました。とくに、紀元前1世紀後半ころより、当時の世界観や宇宙観を鏡にこめるようになります。

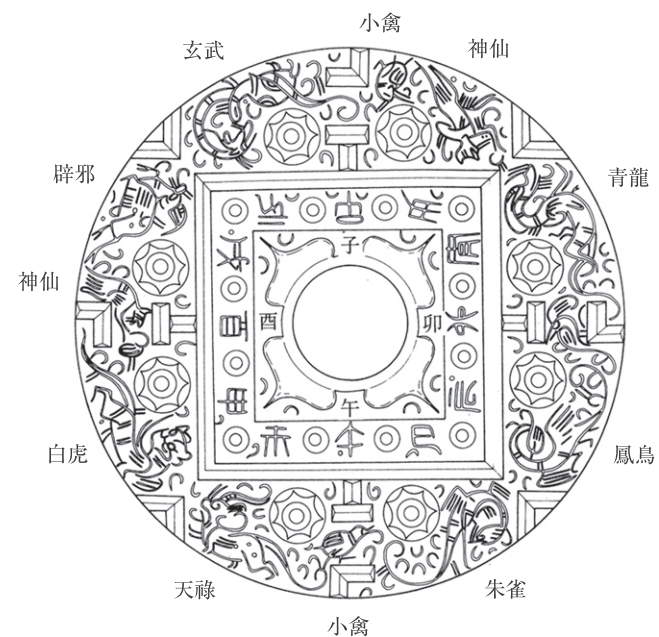
それを最も強く表現しているのが、方格規矩鏡といわれています。この鏡は、円形の鏡体を持ち、半球状鈕のまわりに方格をめぐらせ、その外側にTLV形の規矩文を配して主紋様を区画します。当時、天は丸く地は四角いという観念があり、鏡全体で天空をあらわし、そのなかに様々な天界の神々の紋様を配したわけです。



方格規矩四神鏡 前漢末～新 径18.9cm

その紋様は、四神が中心となります。四神とは、戦国時代以降に流行した五行説でいわれる天の四方を司る神々で、動物の姿を借りてあらわされます。それぞれ東西南北を表す色を冠して、東-青龍、西-白虎、南-朱雀、北-玄武と呼ばれています。この四神のうち朱雀は、商周時代に流行した鳳鳥の系統を引く図像で、玄武は亀に蛇がまわりついた図像です。四神は、鏡以外にも墓室を飾る画像石などにもあらわされ、漢時代に流行しますが、さらに唐時代以降にも受け継がれ、飛鳥高松塚古墳の壁画などに見られるように日本にももたらされました。

この方格規矩四神鏡は、鈕まわりの方格内に十二支の文字を時計回りに入れ、方角を定め（子=北、卯=東、午=南、酉=西）、その方向の区画内に四神を配します。



方格規矩四神鏡内区文様